オホーツク海宗谷暖流情報

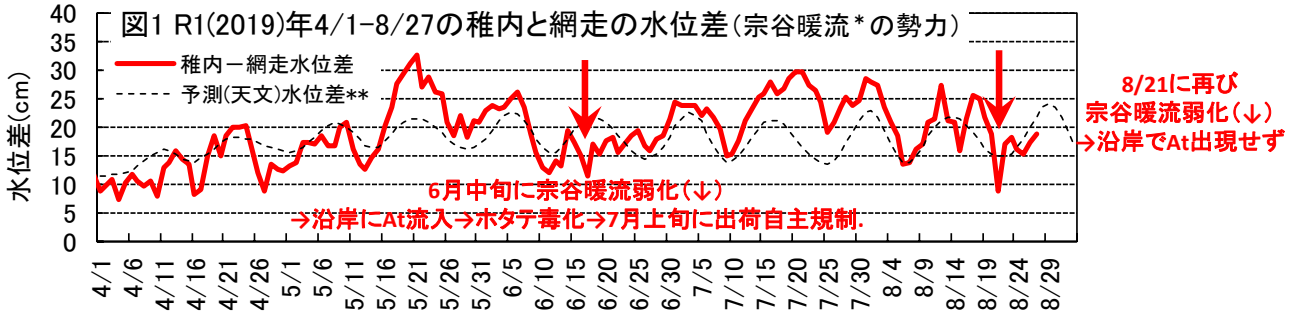
（R1(2019)年8月下旬）

R1(2019)年8月28日
中央水産試験場資源管理部
(担当：海洋環境G　嶋田・品田・佐藤)

●8月下旬現在、宗谷暖流の勢力は例年並です。8/21に宗谷暖流の弱化が再び観測されましたが（図1）、沿岸への麻痺性貝毒プランクトンAtの流入は確認されませんでした（貝毒プランクトン速報：8/21常呂および網走における調査結果）。

●オホーツク海沖合の表面水温は約1カ月にわたってAt消滅の目安となる15℃を超えており（図2）、Atはほぼ消滅したものと推測されることから、麻痺性毒性値は今後緩やかに低下するものと考えられます。

●宗谷暖流情報は今回で終了します。



*宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており，この落差は，稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。
**水位差の予測値は，潮汐表として公開されている予測(天文)潮位から算出することができます(実測値は気圧と風の影響を受けて変動します)。

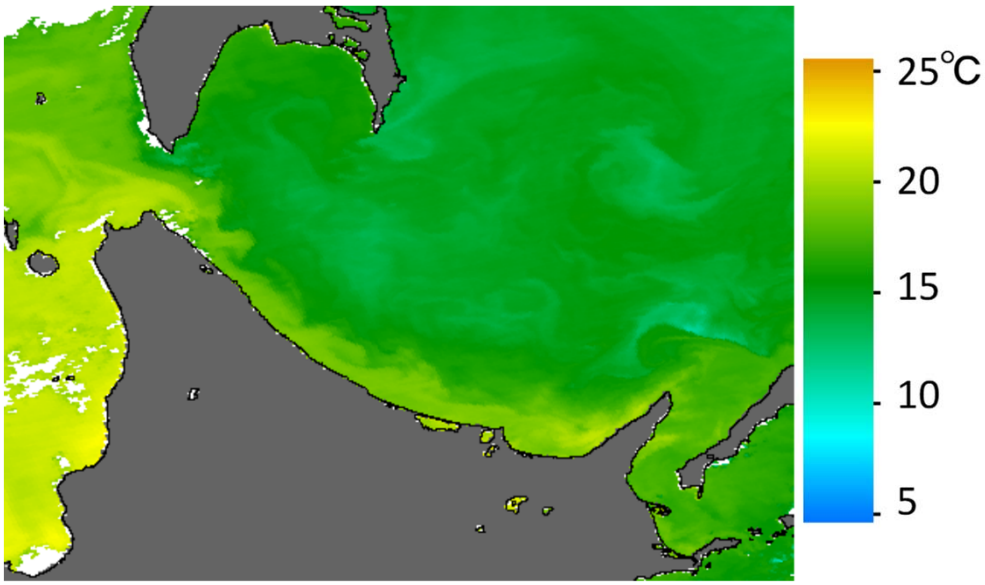


図2　R1(2019)年8/27オホーツク海沖合の表面水温の分布
（衛星画像データ：https://www.eorc.jaxa.jp/cgibin/adeos/modis_index.cgi）

オホーツク海貝毒プランクトン速報

（【緊急追加】R1(2019)年7月下旬～8月上旬）

R1(2019)年8月9日

中央水産試験場資源管理部

(担当：海洋環境G　嶋田・品田・佐藤)

●去る8月2日に7月末の広域分布調査の結果を「表面のAtは34定点中8定点で最高260（細胞/L）分布」とお知らせしたところですが，深度別の海水試料全てを分析したところ，Atは34定点中23定点で，主に深度20mに最高3,280（細胞/L）分布していることが判明しましたので（図1），改めて速報いたします。Atは表層の高水温を避けて沖合の深みに分布しているものと考えられます。

●8月上旬現在、宗谷暖流の勢力は例年並ですが（図2），台風崩れの温帯低気圧の通過などの気象イベントによって北風が吹けば宗谷暖流が弱化してAtが沿岸に流入する可能性も残されています。今しばらく麻痺性毒性値の推移にご注意ください。

●宗谷暖流情報は今後も適宜発信予定です。

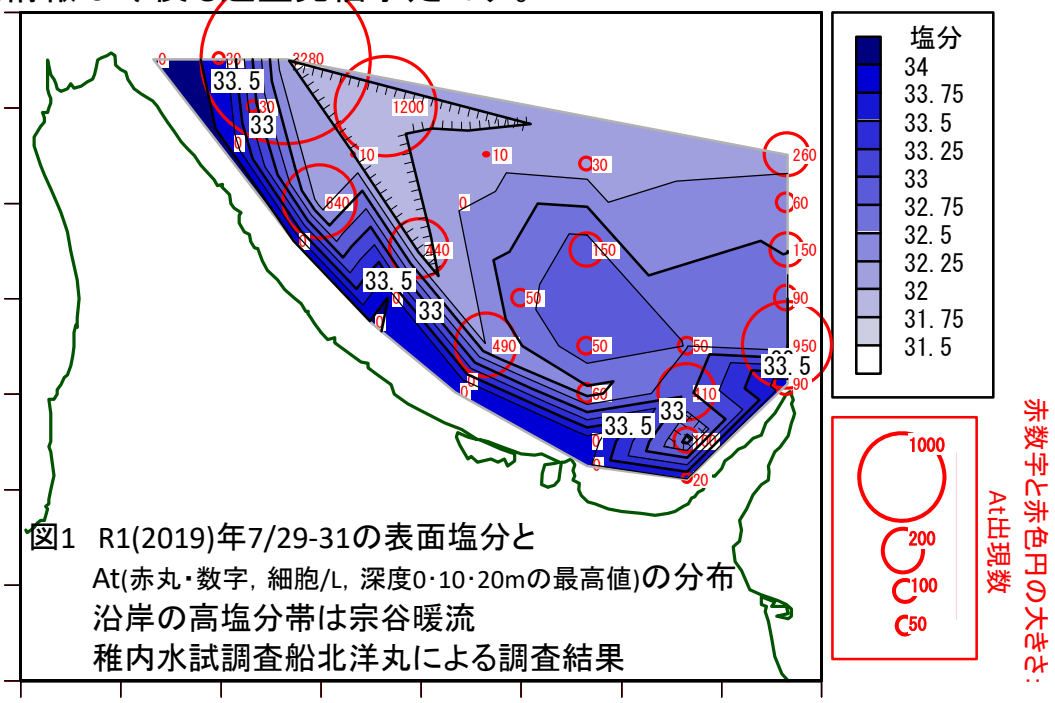
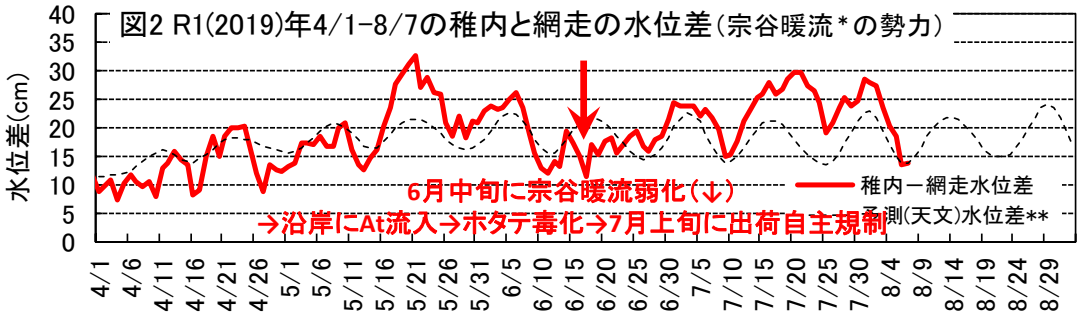


図1　R1(2019)年7/29-31の表面塩分と
At(赤丸・数字，細胞/L，深度0・10・20mの最高値)の分布
沿岸の高塩分帯は宗谷暖流
稚内水試調査船北洋丸による調査結果



*宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており，この落差は，稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。

**水位差の予測値は，潮汐表として公開されている予測(天文)潮位から算出することができます(実測値は気圧と風の影響を受けて変動します)。

オホーツク海貝毒プランクトン速報

（R1(2019)年7月下旬～8月上旬）

R1(2019)年8月2日
中央水産試験場資源管理部
(担当：海洋環境G　嶋田・品田・佐藤)

●7月29-31日にオホーツク海で行った麻痺性貝毒プランクトン(アレキサンドリウム・タマレンセ，略称「At」)の広域分布調査の結果を速報します。

●Atは34定点中8定点で最高260（細胞/L）出現していますが，6月の最高密度（5,250細胞/L）の1/10以下に減少しています（図1）。

●7月中旬以降、宗谷暖流の勢力は強めであり（図2），ほぼ全域でAtの消滅の目安となる表面水温15℃を超えているため（図1），沖合表層のAtが再び増えて沿岸のホタテガイ漁場に流入する可能性は低いものと考えられます。

●広域分布調査は今回で終了しますが，宗谷暖流情報を適宜発信予定です。

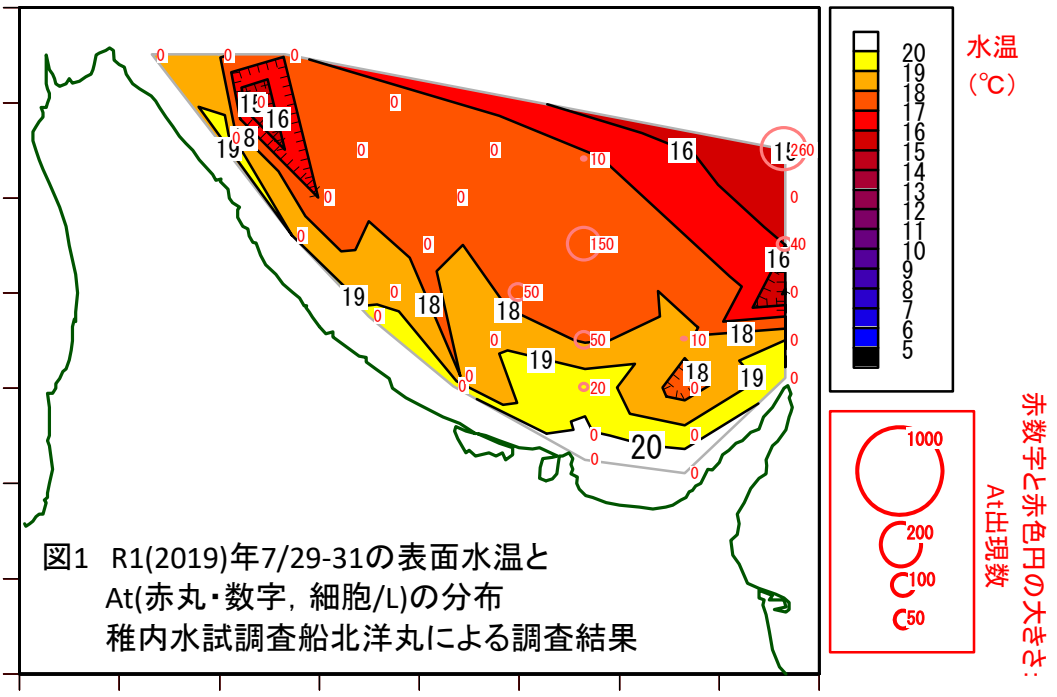
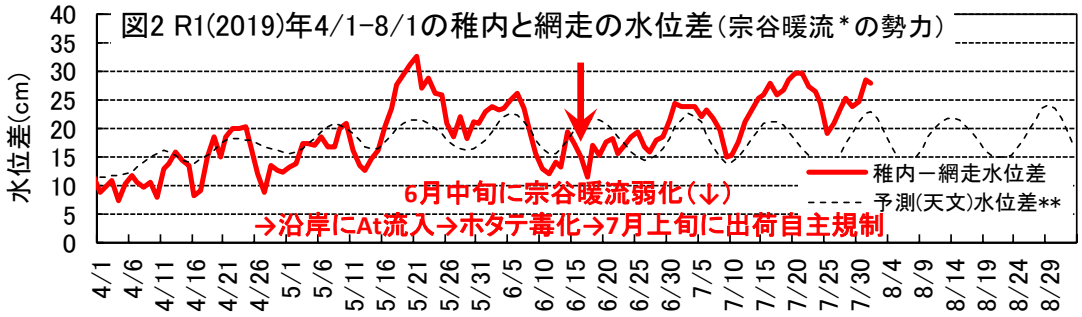


図1　R1(2019)年7/29-31の表面水温と
At(赤丸・数字，細胞/L)の分布
稚内水試調査船北洋丸による調査結果



*宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており，この落差は，稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。

**水位差の予測値は，潮汐表として公開されている予測(天文)潮位から算出することができます(実測値は気圧と風の影響を受けて変動します)。

オホーツク海宗谷暖流情報

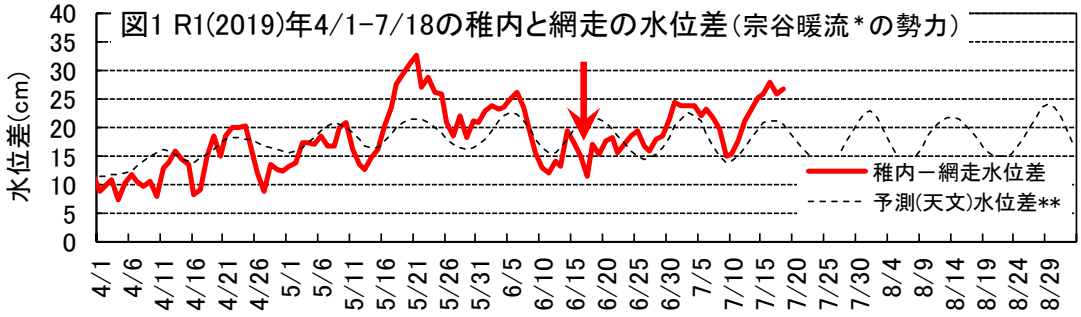
（R1(2019)年7月中旬）

R1(2019)年7月19日
中央水産試験場資源管理部
(担当：海洋環境G　嶋田・品田・佐藤)

●7月2日に網走南部，3日に網走中部，北部および能取湖海域でそれぞれ麻痺性貝毒による出荷自主規制措置がとられました。6月中旬に宗谷暖流の弱勢が観測され(図1，↓印)、沖合に多く分布していた麻痺性貝毒プランクトンAtが沿岸のホタテガイ漁場に流入して，麻痺性毒性値が上昇したものと考えられます。

●7月中旬現在、宗谷暖流の勢力は例年並み～強めに回復していますが（図1），Atの消滅の目安となる表面水温15℃を超えていない海域もあるため（図2），今しばらく毒性値の上昇に注意が必要です。

●次回の広域分布調査は7月下旬を予定しています。



*宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており，この落差は，稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。
**水位差の予測値は，潮汐表として公開されている予測(天文)潮位から算出することができます(実測値は気圧と風の影響を受けて変動します)。

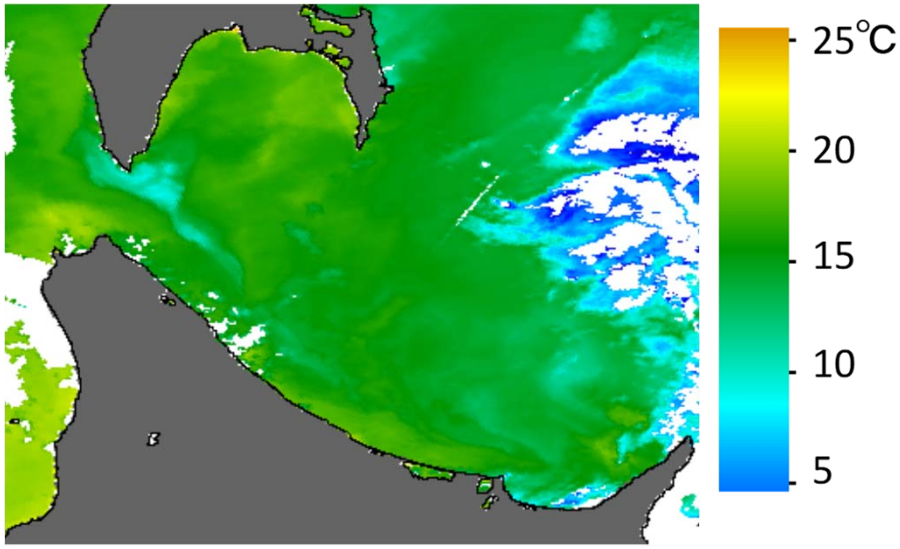


図2　R1(2019)年7/17オホーツク海沖合の表面水温の分布
（衛星画像データ：https://www.eorc.jaxa.jp/cgibin/adeos/modis_index.cgi）

オホーツク海宗谷暖流情報

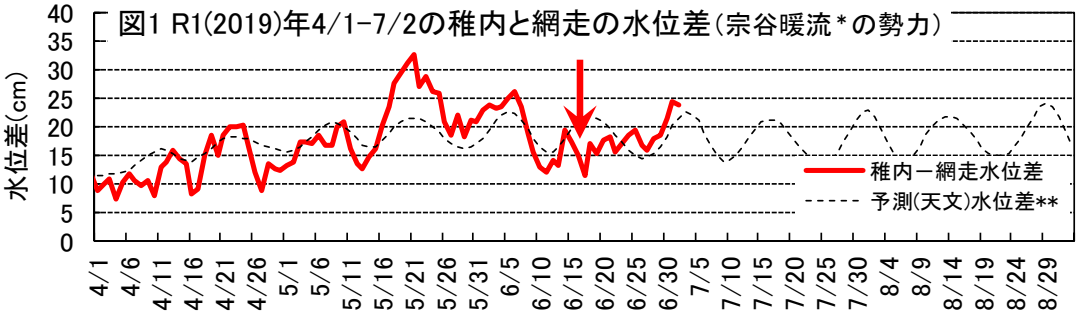
（R1(2019)年7月上旬）

R1(2019)年7月3日
中央水産試験場資源管理部
(担当：海洋環境G　嶋田・品田・佐藤)

●7月2日付けで網走南部海域で麻痺性貝毒による出荷自主規制措置がとられました。6月中旬に宗谷暖流の弱勢が観測され(図1，↓印)、沖合に多く分布していた麻痺性貝毒プランクトンAt(図2)が沿岸のホタテガイ漁場に流入して，麻痺性毒性値が上昇したものと考えられます。

●7月上旬現在、宗谷暖流の勢力は例年並み～強めとなっていますが、ホタテガイが生息する海底付近に沈んだAtは残っていると推測されます。未だ出荷規制措置がとられていない海域についても、今後の毒化に注意が必要です。

●次回の広域分布調査は7月下旬を予定しています。



*宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており，この落差は，稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。

**水位差の予測値は，潮汐表として公開されている予測(天文)潮位から算出することができます(実測値は気圧と風の影響を受けて変動します)。

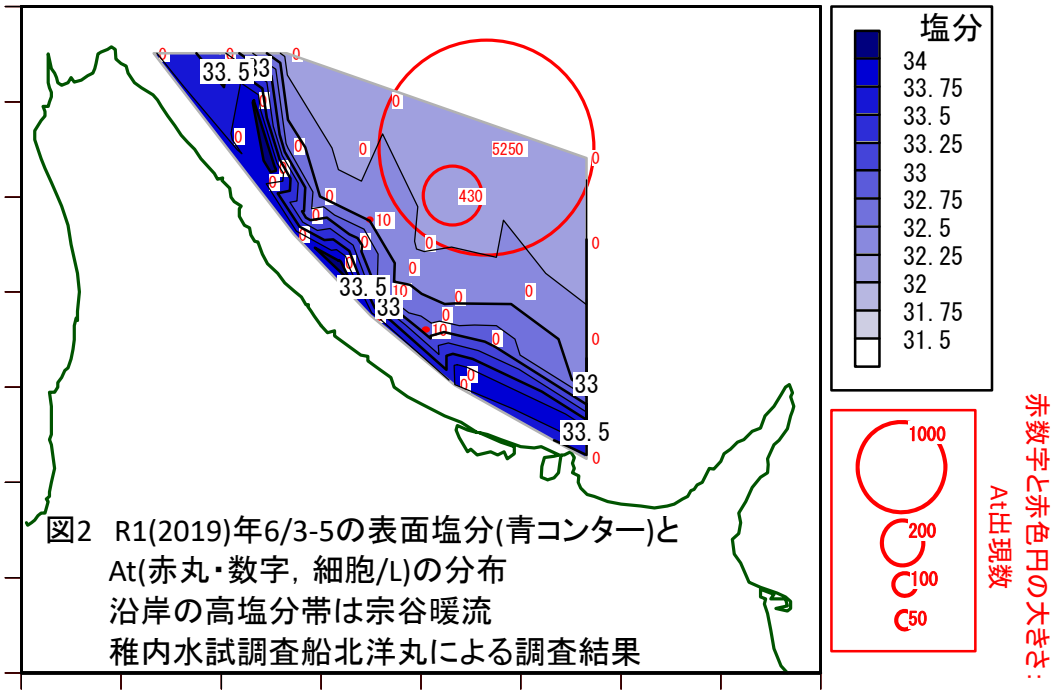


図2　R1(2019)年6/3-5の表面塩分(青コンター)と
At(赤丸・数字，細胞/L)の分布
沿岸の高塩分帯は宗谷暖流
稚内水試調査船北洋丸による調査結果

オホーツク海宗谷暖流情報

（R1(2019)年6月中旬）

R1(2019)年6月18日
中央水産試験場資源管理部
(担当：海洋環境G　嶋田・品田・佐藤)

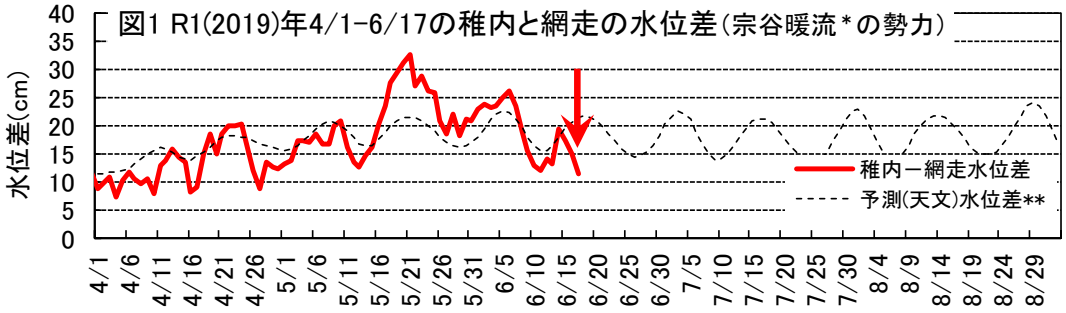
●6/17に宗谷暖流の弱勢が観測されました(図1，↓印)。6/16-17の低気圧の通過前後に北よりの風が続いたことが原因と考えられます。

●6月上旬の広域分布調査によって，麻痺性貝毒プランクトンAtは，沖合に多く出現していることが分かっています(図2)。

●宗谷暖流の弱勢が観測されたことから(図1)，Atが沿岸のホタテガイ漁場に流入して，麻痺性毒性値が上昇する可能性があります。毒性値の情報にご注意下さい。

●宗谷暖流の勢力については，適宜情報として発信予定です。

●次回の広域分布調査は7月下旬を予定しています。



*宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており，この落差は，稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。

**水位差の予測値は，潮汐表として公開されている予測(天文)潮位から算出することができます(実測値は気圧と風の影響を受けて変動します)。

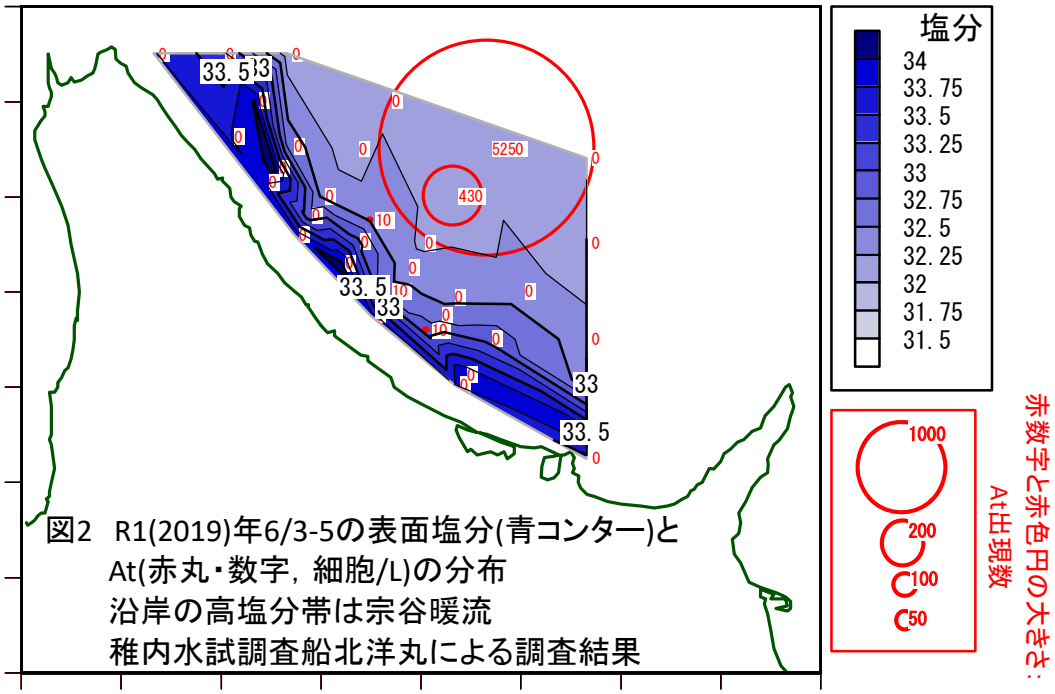


図2　R1(2019)年6/3-5の表面塩分(青コンター)と
At(赤丸・数字，細胞/L)の分布
沿岸の高塩分帯は宗谷暖流
稚内水試調査船北洋丸による調査結果

オホーツク海貝毒プランクトン速報

（R1(2019)年6月上旬）

R1(2019)年6月7日
中央水産試験場資源管理部
(担当：海洋環境G　嶋田・品田・佐藤)

●6月3-5日にオホーツク海で行った麻痺性貝毒プランクトン(アレキサンドリウム・タマレンセ，略称「At」)の広域分布調査の結果を速報します。

●Atは，35定点中5定点で最高5,250(細胞/L)出現しています(図1)。最高密度が毒化の目安となる100細胞/Lを大幅に超えており，注意が必要です。

●6月上旬現在，稚内から網走の方向に沿岸を流れる宗谷暖流の勢力は強めです(図2)。しかしながら，Atが多く出現していることを考慮すると，宗谷暖流の勢力が弱まれば，Atが沿岸のホタテガイ漁場に流入して，麻痺性毒性値が上昇する可能性があります。今後の宗谷暖流の勢力については，「オホーツク海宗谷暖流情報」として適宜お知らせする予定です。

●次回の広域分布調査は7月下旬を予定しています。

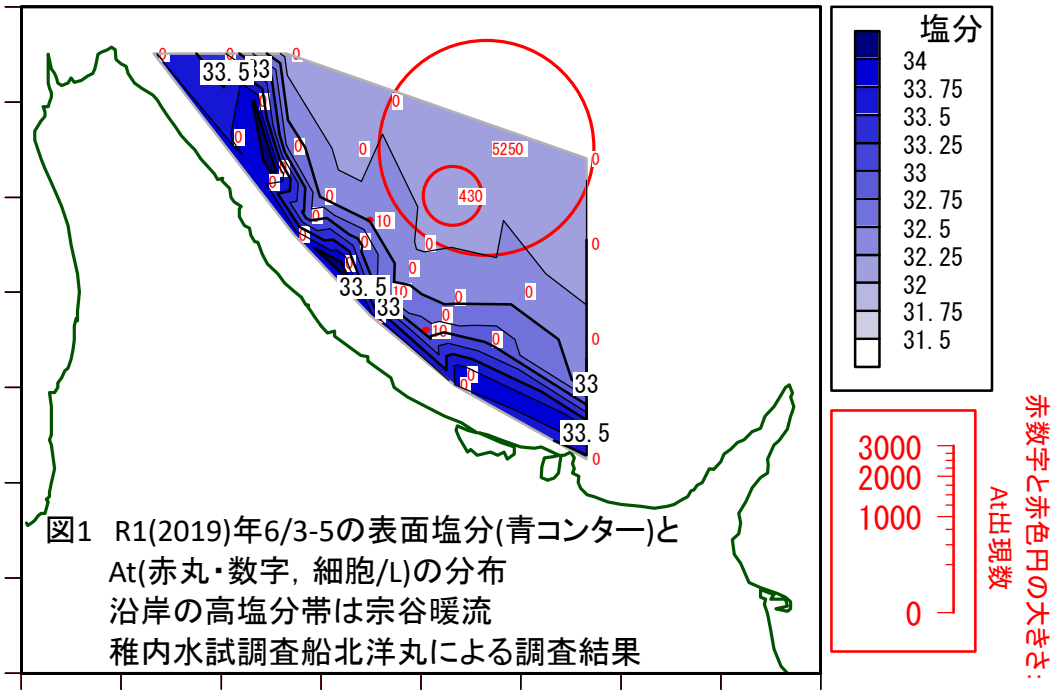
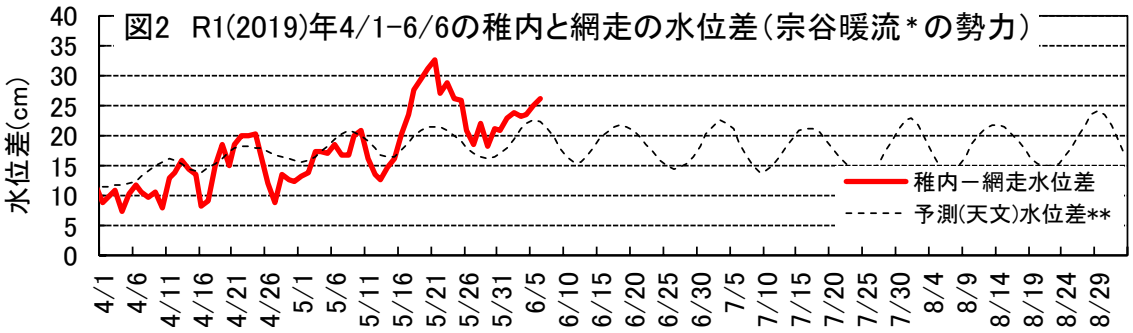


図1　R1(2019)年6/3-5の表面塩分(青コンター)と
At(赤丸・数字，細胞/L)の分布
沿岸の高塩分帯は宗谷暖流
稚内水試調査船北洋丸による調査結果



*宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており，この落差は，稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。